

鎖を断ち切ろうとする琉球の人々

東アジアのなかの近代沖縄

『うるまネシア』編集委員 後田多敦

- 一三四年ぶりの和解
- 北京で自殺した琉球知識人
- 冊封からの離脱がもたらしたもの
- 台湾と琉球との親和性
- 小さな社会からアジアを見通す

明治以前の「琉球」はアジアに開かれていた。明治政府の武力による琉球「併合」に抵抗する知識人の足跡は、台湾、北京などアジア各地に残されている。東アジア近代の歴史のなかで沖縄を縛る鎖とはなにか。その鎖を断ち切る道はどこにあるのか。東アジアに開き、結びつくことで関係を作り変えようとする動きから近代沖縄を考える。

一三四年ぶりの和解

五年ほど前のことだが、台湾・牡丹郷の林傑西さんを代表とする訪問団が二〇〇五年六月一六日、民族衣装で那覇市若狭の台湾遭害者之墓を訪れ、慰霊式を行った。その墓には、台湾に漂着して殺された「琉球人台湾遭害事件」の犠牲者五四人の遺骨が納められている。訪問団の訪問は一三〇年前の「琉球人台湾遭害事件」の謝罪と交流が目的

だった。一行はさらに宮古島まで足をのばし、交流を深めていた。

「琉球人台湾遭害事件」は一八七二（明治四、同治一〇）年秋、宮古島の貢納船が那覇での任務を終え、帰任の途中に暴風にあつて台湾に漂着し、上陸までに三人が溺死して、上陸した六六人は山間部の牡丹郷に迷い込んで、パイワン族に五四人が殺害されたという出来事だ。殺害された

なかには宮古の行政責任者の仲宗根玄安もいた。生き残った一二人は福州経由で帰国したが、事件は近代日本が行った最初の海外派兵である台湾出兵の理由とされ、琉球国併合にも利用された。遺骨は出兵の際、現地から回収されている。

慰霊祭を行ったのは、殺害に加わった牡丹郷の子孫である。慰霊祭には仲宗根玄安の子孫・仲宗根玄治さんも招待された。林団長は「風習の違いや誤解から悲しい事件が発生したが、事件から一三〇年余、和解することで悲しい歴史を新しい関係に変えていこう」と話し、仲宗根さんは「お参りは喜ばしいことで、感激している。感無量だ」と心じ、墓前で握手を交わした。慰霊祭のきっかけをつくった歴史家の又吉盛清さんは「事件は国家に利用されてしまったが、国策に利用されないように今後は手を取り合っていこう」と式典で語っていた（『琉球新報』二〇〇五年六月一七日）。

式典や交流会に私も参加したが、台湾の原住民族である訪問団のメンバーの顔かたちや立ち居振舞いなど、沖縄人とよく似ていて、近所のおじさんたちの輪に入っているような近い世界だった。印象に残ったのは、もとパイロットだったという団員の一人が「飛行機の操縦は間違ったことがない。二度と不幸なことは起こらない」と飛行機に例

えて、話していたことだ。大きな力に利用されないために、互いの草の根の交流が必要だと話は尽きなかった。

日本と清国は一八七二（明治四）年七月、日清修好条規を締結している。「琉球人台湾遭害事件」が起きた年でもあるが、日本はその翌年九月には琉球国の維新慶賀使節に対し、琉球藩の設置を宣言した。中国の冊封体制をまねたいわば天皇による擬似「冊封」のようなものである。日本は琉球国併合に具体的に動き出したわけだ。修好条規批准のため清国へ派遣された副島種臣は、台湾への派兵を想定して動いていた。

島嶼国家だった琉球国では、海難事故は頻繁に発生しており、琉球人の台湾遭害事件もその一つだった。しかし、日本は「冊封」や「琉球藩民」を利用しながら、台湾派兵の口実を探し出していく。日本の軍隊派遣の動きを知った琉球国は、台湾への派兵を止めるよう申し入れていたが、日本はそれを無視した。そして出兵後は、琉球のために派遣したとして、謝意を示すためにも尚泰（国王）を上京させるよう、要求する。

日本が琉球人台湾遭害事件を琉球国併合やアジア侵略に利用した歴史を見ると、その一三〇余年後に台湾遭害者之墓の墓前で、当事者の子孫による慰霊祭が開かれたのは意義深い。関係者が互いに和解の握手をしている姿には、二度と

国家に利用されないようにしようという決意が感じられた。

北京で自殺した琉球知識人

今年(明治三十三年)は名城里之子親雲上(中国名・林世功)が一八八〇(明治一三)年一月二〇日(旧曆一〇月一八日)、北京で自殺してから一三〇年になる。当時、北京で琉球救国運動をしていた名城は日清間で合意された「琉球分割条約」に対し、抗議の自殺をしたのである。名城里之子親雲上(林世功)や「琉球分割条約」といっても、そのことを知っている読者はほとんどいないだろう。しかし、いずれも、先の琉球人台湾遭害事件の延長線上にあり、沖繩近代の歩みを考える上で欠かすことのできない重要な人物の一人であり、事件である。

名城は琉球国が清国に派遣した最後の留学生で、一八六八(明治元年)年に北京国子監に入学し、日本が台湾へ派兵した一八七四(明治七)年に帰国している。帰国後は世子・尚典の教師を務めていた琉球国末期を代表する知識人である。首里王府が日本の琉清関係断絶命令に対抗するため、幸地朝常(向徳宏)を清国に派遣した際、名城は北京語に通じ、北京の事情にも明るかったことから、通訳で北京を訪問した経験のある伊計大鼎(蔡大鼎)らとともに一八

計大鼎らによつて張家湾に葬られた。名城の行動に同情した清国政府は、葬送費用を出している。名城らの事跡を検証した西里喜行は、名城らの運動が日清間で一度は議定された琉球分割条約の調印を阻止したと見ている(『清末琉日関係史の研究』京都大学学術出版会)。

名城は死に際し辞世の詩二編と、さらに死稟とも呼ぶべき清国への請願書を残した。名城の詩文などを研究している上里賢一の読み下しと訳で紹介しておきたい。

其一

古来忠孝幾人全 古来忠孝幾人が全からん

憂国思家已五年 国を憂い家を思いて已に五年

一死猶期存社稷 一死猶お期す社稷の存するを

高堂専頼弟兄賢 高堂専ら頼る弟兄の賢

むかしから君主に対する忠と親に対する孝という二つの道をまつとうした人は何人いるだろうか。わたしは、国を憂い家を思つて福州に渡つてからすでに五年になる。いっこうに好転しない琉球救国の現状を打開し、琉球国の存続という大義のため命をかけよう。ご両親におかれては、どうか賢明な兄弟に頼られたい。

名城の琉球救国への思いと、ふるさとに残した父母への

七六(明治九年)二月一日、使節団の一員として再び渡清していた。

日本の琉球国併合当時、福州にいた名城らは、首里城明け渡しや国王の東京連行という情報を得ると、一八七九(明治一二)年旧八月一四日、北京へ向かい、清国政府へ救援を訴えていた。メンバーは名城のほか、国頭盛乗(毛精長)、伊計大鼎(蔡大鼎)、湖城以正(蔡以正)らのほか、中国側の琉球通訳謝維垣ら。名城らは北京へ向かう途中、天津で李鴻章に琉球救援を訴えていた幸地朝常に会つて、琉球分割条約などの情報を得ている。

琉球分割条約というのは通称だ。日本は、琉球国併合に対し清国から抗議されていたこともあり、日清修好条規改定のなかで宮古・八重山(琉球の南の諸島)を切り離し、清国領とする内容を盛り込み、帰属問題を決着しようとした。清国側は宮古・八重山へ「琉球国を建国すること」で、琉球側の救援要請との折り合いをつけようとしていた。日清間では宮古・八重山の切り離しで思惑が一致し、琉球分割条約案は議定され調印の予定日まで決まっていた。それに対し、北京にいた名城らは、分割を阻止し、琉球全体としての復興を目指したのである。

名城は一月二〇日(旧一〇月一八日)、抗議の自殺をした。名城の遺骸は、行動を共にし、名城の死を見届けた伊思いが伝わってくる。もう一編の詩は、両親に対し先に死ぬことに対してわびる内容だ。琉球分割阻止に命をかけて抗議した若い知識人の死は、沖繩にも伝わって衝撃となり、人々の心に刻まれたようだ。

名城の三三回忌が一九一三(大正二)年一月一日、那覇で開かれた。新聞は「同情者多し」とし、かつて名城から教えを受けた尚典(侯爵)も祭典料を提供し、霊前に挽歌を捧げるものも多かったことを伝えている。そして、名城に捧げる漢詩などが数日にわたつて、新聞に掲載されていた。三三回忌に遺族は名城の詩集『琉球詩録』『琉球詩課』を配布したという。関係者が存命だったこともあるだろうが、没後三〇年以上経過しても、人々は名城のことを忘れてはいなかった。

さらに、昭和期にも名城が話題になっている。沖繩郷土協会は一九三九(昭和一四)年八月、「郷土文化史に偉大な功績を残した林世功、よしや(吉屋ちる)、ペリ(ペリー提督)」の記念碑の建立計画を立てていた。記念碑が実際に建立されたかどうかははっきりしない。日本との関係から、名城を顕彰することを危惧する声もあったので、実現しなかったのだろう。

琉球を代表する知識人名城は、社会変動に巻き込まれ、琉球救国運動に参加せざるをえなくなったが、直接的に立

ち向かった課題は二つだった。一つは琉清関係断絶命令への抵抗、もう一つは琉球分割条約阻止ということになるだろう。救国運動そのものは敗北したが、琉球分割条約を阻止することには成功した。

ただ、当時の沖縄には、宮古・八重山分割を支持し、そこに一度ミニ琉球国を建国し、全体として再興する機会を待とうという意見もあった。その意味では琉球分割条約阻止に成功したことが、琉球救国運動のもう一つの可能性を封印したことになるのかもしれない。いずれにしても、名城は死ぬことで、時代の潮目で琉球社会の分断阻止の方向へ舵をきったのである。

冊封からの離脱がもたらしたもの

日本は一八七五（明治八）年、琉球国併合政策の一環として、琉球に対して清国への使節派遣など、往來の禁止、福州にある琉球の公館の閉鎖などを一方的に命じている。これは、琉球国の中国の冊封体制からの離脱を意味するものだが、那覇港に関していえば、閉鎖である。そのころ、清国の光緒帝即位を慶賀するために派遣される予定だった慶賀使の東風平親方ら一行は、出港を待機していたが、結局出発できないまま旅装を解いている。

那覇港開港には、二年間に五万円分の貿易実績があることという条件がついていた。最初の二年間の条件をクリアするため、彼らはチャーター船を準備し、香港から五万円分の穀物を直輸入させている。

そして、丸一店は一九〇二（明治三五）年、福州支店である丸一洋行を開設する。丸一洋行は福州に茶工場を設置し、茶を中心とした貿易商として大正期まで大規模に営業を展開していた。丸一洋行に対し、福州では琉球の国王の資本で開設したとして信用があったという。

そのころの福州には琉球国時代からの「琉球館」が存続し、琉球の復興を求める亡命琉球人が、活動していた。丸一洋行開設にかかわった渡久山朝恭や丸一店支配人の幸地朝瑞も、かつて運動に参加した人物である。救国運動の経験があり、中国語に堪能だった渡久山朝恭は香港へも足を運び、設立期の丸一洋行の活動を支えていた。琉球館にいた人々も、時には連携し、時には競争しながら福州・沖縄の交易にかかわった。福州と沖縄との交易には、福州側の茶商、沖縄側の茶商数社が参加し、昭和期まで貿易が続く。このような関係を破壊したのは日本の侵略であり、戦争である。

琉球救国運動の人々やその周辺の貿易商らは、かつての冊封体制のつながりのなかにあった。琉球館を拠点とした

琉球国が五〇〇年にわたって参加していた中国の冊封体制は、東アジアの安全保障体制であると同時に、経済ネットワークでもあった。琉球側は福州で商取引ができたのである。しかも、免税である。琉球使節は皇帝の客であり身元も保証されていた。公式な文化儀礼交流とあわせて、開催されている定期的な物産展のようなものをイメージすればいいのかもしれない。

このような琉球と清国の良好な関係は、日本によって武力を背景に切断された。アジアに開かれていた琉球を日本の枠のなかに封じ込め、さらに置県後も「旧慣温存」政策でがんじがらめにしていった。ところが日清戦争で、日本が勝利し台湾が割譲されると、那覇港は開港されることになった。部分的開港を経て、一八九九（明治三二）年に那覇港も開港場として指定された。

那覇港開港を一大チャンスと考えたのは、尚王家の周辺にいた琉球自立・独立グループである。沖縄銀行取締役だった幸地朝瑞らは、尚典を主人に「丸一店」を商号登記し、支配人として福州との関係再構築へ取り組んでいく。朝瑞の父朝常は琉清関係断絶命令に抵抗するため、一八七六（明治九）年一二月に名城里之子親雲上らを伴って渡清した、琉球救国運動の初期のリーダーだった。朝瑞自身も亡命し、運動に参加した経験を持っていた。

琉球人の活動は、明治には琉球国の官吏と同様に扱われ、清国政府から経済的支援も受けていた。しかし、その清国が一九一一（明治四四）年一〇月に勃発した辛亥革命で滅亡する。琉球館のある福州でも一二月には、革命軍が蜂起し政権が交代した。冊封体制の前提そのものが完全に消滅したのである。

琉球救国運動にかかわったメンバーで辛亥革命側に加担した人物は確認できない。沖縄人では新垣弓太郎が革命に参加していた。当時の新聞は、新垣弓太郎のインタビューを掲載し、動向を伝えている。弓太郎は蒋介石の上司でもあったという（比嘉康文『沖縄独立』の系譜―琉球国を夢見た6人『琉球新報社』。清国側、中華民国側の双方につきながりが存在していた。

台湾と琉球との親和性

吳藻江の『琉球』（中文）という五〇頁程度の小冊子が手元にある。台湾省教育会から、民国三十七年一二月に出版されたものだ。民国三十七年は、西暦でいうと一九四八年。小冊子は米軍に占領されている琉球の帰属問題を意識して執筆されている。著者の吳藻江が何者なのかはつきりしないが、内容からするとおそらく台湾にいた沖縄人と考えてい

いだろう。

この小冊子は、台湾で琉球の独立運動にかかわっていた赤嶺親助(中国名・蔡親)が、創刊間もない「沖繩タイムス」の高嶺朝光社長に贈呈したもののようだ。表紙には「謹呈 高嶺朝光啓」「赤嶺親助 漢名蔡親」とある。受け取った高嶺朝光は関心がなかったのか、それとも読んだあとだったのか、手元に置くことはなく、別の人の手に渡って、めぐりめぐって私の手元に届いたことになる。

小冊子には二通の手紙がはさまこまれていた。二通とも蔡璋が「赤嶺同志」へ宛てた民国三八年四月二三日付のものである。手紙には、状況が分かる新聞を可能な限りたくさん送ってくれ、というようなことが中国語で書かれている。手紙の日付の民国三八年は西暦でいうと一九四九年で、中華人民共和国が建国された年になる。蔡璋は喜友名嗣正の中国名である。「赤嶺同志」とあるように、蔡璋も琉球独立運動にかかわり、この時期は台湾にいた。喜友名が沖繩にいた赤嶺に新聞を送ってほしいと手紙を送っていた。

赤嶺は自分に届いた手紙にさらに説明を書き加えて、小冊子とともに高嶺社長に贈り協力をお願いしたということだろう。赤嶺は高嶺へのメッセージに喜友名は自分の後について運動をしていると、紹介している。赤嶺親助(蔡親)

の重要性を指摘した。アジア沖繩経済研究所の宮城弘岩代表が今年七月二八日、台湾を訪問して、江理事長と会談した際に提起されたものだ。宮城代表とは台湾大学の同窓で、旧知の仲だという(「沖繩タイムス」七月二九日、会談内容は八月一二日に詳報)。

江理事長によれば、ECFAは自由貿易協定(関税率引き下げ交渉)、サービス産業の市場開放、投資ファイナンス、トラブルの際の解決のメカニズムの構築などから構成される。ECFAの付属表によると、優先的に関税を引き下げる項目があり、台湾から中国への輸出が五二九項目あり、二年内にゼロ関税にする計画だという。

沖繩に関して江理事長は「(沖繩を)一国二制度にして完全な自由貿易国をつくらばいい。沖繩という特殊性を利用して、香港並みの輸入関税ゼロ、沖繩全体を自由貿易地域にする。そして、法人税を台湾、香港並みの一七%にすればいい。台湾の企業が沖繩に進出するし、日本の企業も沖繩から世界へ出るだろう」と語っている。台湾の対中国交流責任者の沖繩への連携の呼びかけは、大きな意味があると思う。

江丙坤理事長と会談したアジア沖繩経済研究所の宮城弘岩代表は沖繩県物産公社の専務時代に「わしたショップ」を立ち上げ、沖繩物産のブームを仕掛けた人物だ。台湾大

と喜友名嗣正(蔡璋)らは、戦後の台湾で琉球の独立運動をしていたが、赤嶺は喜友名より先に沖繩に戻った。

国民党の蒋介石は一九四九(昭和二四)年一月、大陸を離れ台湾へ移動しているため、手紙の時期はその前ということとなる。占領していた日本も敗戦で撤退し、台湾は緊迫し情報がほしかつただろう。その後台湾を拠点とした国民党政府は、一九七二年の沖繩の「日本復帰」を認めずに、抗議の外交部声明を出している。台湾の国民党でも、清国時代からの「琉球」への親和性が続いていた。

台湾は激しい変化や多くの困難のなかから、確実に復興を成し遂げている。そして、中国と急接近している。その台湾と中国は今年六月、経済協力枠組み協定(ECFA)を締結した。自由貿易協定だ。数年前の政権交代で、政治的な微妙な関係はさておき、まず経済的な関係から構築したいということだろう。この経済関係が、やがてさらなる段階を生み出すことは当然、予想される。

台湾の国民党副主席で、対中国交流窓口機関「海峡交流基金会」の江丙坤理事長は「沖繩が台湾とFTA(自由貿易協定)を結べば面白い」と話している。江理事長はECFAで台湾と中国の経済協力が加速するのを受け、沖繩を加えた「中台沖」の三角形による経済協力や自由貿易協定

学大学院に学んだこともあり、台湾に広い人脈を持っている。宮城代表は一〇数年前にも、沖繩の全県フリーゾーンを提案し熱い議論となっていたが、その際は日本政府との関係もあり、実現できなかった。いま振り返って当時の議論を読みなすと、沖繩内でも全体としてその意味や互いの主張の趣旨が理解されなまま議論がなされていた感がある。

宮城代表は「日本の補助金は要らない、制度さえきちんと整備されれば、沖繩は自立してやっていける。日本の経済が衰退しているのだから、日本政府にとっても、お金のかわらないいい方法だと思おう」とも話していた。物流の点から見れば、沖繩は多くの法令上の足かせがあり、法令を整理するだけでも、経済活動が変わるといえる。

対立から協調へ。中国と台湾の関係が変わり始め、最終的にはどこへ向かうかは分からない。それでもECFAなどを通して、経済の結びつきが加速し、中台関係が強化されていく流れは後戻りできない動きであることだけは確かだと思おう。昨春秋、香港から中国の山東省の済南へ小旅行をした。宿泊したホテルには日本人は見当たらなかったが、台湾からの客は何人かいた。また街のあちこちで進む大規模な公共工事などを見れば、一目見ただけでも、動き始めた大国の歯車がすぐに止まったり、逆戻りすることは

できない状態であることは納得できる。

宮城弘岩代表は、中国と台湾が接近し、経済の枠組みが変わり始めた今が、沖縄の産業構造を転換する最大の契機だという。そこに「潮目」を見る。このような発想と動きは、沖縄の歴史を一瞥すれば、不思議なことではない。近代社会では古いイメージで見られていた東アジアの秩序も、冊封体制を崩壊させた近代の歯車が、少しずつ逆に回りだしたことで、別の視点で見られるようになってきた。ECFAもその一つだろう。新しい枠組みのなかで、どう生きていくのか。沖縄にとっても時代の節目がやってきた。

小さな社会からアジアを見通す

台湾の詩人・陳黎の詩集『華麗島の辺縁』（思潮社、二〇一〇年）を読んで、一枚の写真と、それに添えられた詩に目がとまった。詩集から、幾重にも重なった台湾の歴史を生きる重さが伝わってくる。

ブヌン族の彫像

カレーの市民を彫刻したロダンが彼らを見て立ちあがるように要求するかどうかはわからない

を訪れ遺族と手を取り合った。ブヌン族九人の手足を鎖で繋いだ日本は、その後どうしたのだろうか。手足の鎖と魂の鎖と。近代のなかで、琉球人（沖縄人）はブヌン族と同じような位置だったことを思いだす必要がある。沖縄の来し方はどうだったのか。

琉球から沖縄へ。近代沖縄の歩みは、日本によつて清国との関係を断絶させられるところから始まる。いわば「閉国」ともいえる。近代日本の始まりが「開国」に象徴されるとすると、琉球は「閉国（閉鎖）」となる。琉球はアジアとの関係を断絶されて閉塞し、その閉塞はその後の沖縄の多くの悲劇と結びついていた。一方で、沖縄にはその鎖を断ち切ろうとする人々がいた。近代史のなかでいえば、「鎖を切る」というその思いは、アジアの人々に共有し受け継がれたものでもある。

日本は琉球国を併合することで、「閉国（閉鎖）」から始まる異なる歴史を持つ社会、いわば「異物」を抱え込んだといっているだろう。日本はこの異物がある時は抱え込むことで利用し、時に貸し与えて利益を享受してきた。しかし、日本の「開国」と琉球の「閉鎖（閉国）」は、別のものではなく同じ文脈の中にある。それは、近代日本が選択した道と、切り捨てた道とでもいうことができるものだ。

いま沖縄人は、長いこと覆いかぶさっていた米国の重し

九人の頑固そうなブヌン族が分駐所の前に並べられ手足は鎖で繋がれているが、彼らの魂は繋がれていないもし、大きな斧が彼らの頭を落として石にしまったら彼らの体はなお完全に彫像として自分達の土地の上に立っていることだろう。今、彼らは審判を待っているところで統治者の手が彼らを不朽の像にするのを待っている

イカノ社のラマトケンケンと彼の四人の息子
ケントウ社のタラムと彼の三人の弟達、（彼は日本人から脅かされる前に出頭を勧めた母を殺している）

彼らの目は正面を見つめ、面容にはそれぞれ異なる発音のブヌン族のことで「莊嚴」と彫られている。莊嚴なる哀愁
莊嚴なる無関心、莊嚴なる自由……彼らは生まれつきの石

台湾の大関山駐在所付檜谷で、原住民が一九三二（昭和七）年九月一九日、警察官二名、警丁一名を殺した事件があった。陳はその事件で逮捕された九人が鎖で繋がれ、裸足で横一列に並んだ写真を読み解き、詩を書いている。行きつ戻りつのは、陳黎の詩「ブヌン族の彫像」で過去に引き戻されてしまった。近代のアジアをたどれば、至るところで似たような日本の残像にであらうだろう。

最初に紹介した牡丹郷のメンバーの民族衣装の鮮やかさが蘇ってくる。偶発的な事件の一方であった彼らは、沖縄が、かつてほど強固なものでないことに気づき始めている。そして、その背後にある鎖の正体も少しずつ浮かび上がってきた。それらに気がついたとき、「日本復帰」以後、そして沖縄戦から、さらには琉球国併合以後のそれぞれの枠組みを、相対化するのには遠い話ではない。これらの変化は、沖縄が主体的に変わったからではなく、近隣アジアの変化の大きな渦がもたらしたものである。小さな社会が置かれていた位置は、常にそういうことなのかもしれない。しかし、大きな渦のなかで、小さな社会でも流れに掉さし動くことはできる。これは沖縄が歴史から学んできた教訓である。

このように考えると、鎖を断ち切ろうとした人々の存在の意味があらためて浮かび上がってくる。切り捨て、封印してきたものに、アジアの人々との共存を探るヒントや豊かな世界への道があるように思う。これは異物を抱え込んだ日本にとつても同じことだ。閉そくしている今だからこそ、自らの社会を大切にしながら歴史を見直し、新しい形でアジアへ開いていく努力が求められている。その努力は必ず共感を呼び、新しい時代を切り開く力になるだろう。

しいた、あし

一九六二年沖縄県石垣市生まれ。「ゆるまアジア」編集委員。著書に「琉球の国家祭祀制度
その変容・解体過程」(出版者MUGEN)。